

目次

【第1部 総論】

第1章 日本哺乳類学会のあゆみ	1
1. 設立前後から合併（合流）まで	（金子之史） 1
1) 人はなぜ「学会」をもつか	1
2) 東京生物学会の設立	2
3) 「日本哺乳動物学会」の創立	4
4) 1945年に蘇（甦）生した「日本哺乳動物学会」	6
5) 1955年の「ネズミ研究グループ」から「哺乳類研究グループ」へ	6
6) 1987年の「日本哺乳類学会」の誕生	8
7) 時代変化に伴うグループや学会組織のあり方の変化	10
8) 理論と事実（具体）との関係	11
2. 日本哺乳類学会発足以降の歴史	（常田邦彦） 13
1) 自然環境の保全と鳥獣をめぐる動き	14
2) 哺乳類学会の組織的発展	15
3) 学会活動の展開	24
4) 結 び	30
付記 カタカナ目名問題	（大泰司紀之） 31
コラム 徳田御稔	（岩佐真宏） 32
コラム 内田照章	（毛利孝之） 33
コラム 宮尾嶽雄	（子安和弘） 33
第2章 日本の哺乳類学の源流	（安田雅俊） 34
1. はじめに	34
2. 本草学から哺乳類学への道のり	34
1) 本草学の発展と限界	34
2) 西洋博物学の摂取と普及	35
3. 近世資料における哺乳類	36
1) 産物調査と地誌	36
2) 狩猟の記録	37
3) 外国との交易	37
4. 動物の利用をめぐる規制と許容	38
1) 肉食忌避の始まり	38
2) 生類憐み政策と穢れ忌避制度	39
3) 獣肉の薬食	40
4) 牛馬と身分制	40
5. 狩猟と鉄砲の規制	41
1) 支配者の狩猟と民間の狩猟	41
2) 鉄砲規制と被害防除	41
6. 民間の狩猟と猟師	42

1) 猟師とはだれか	42
2) 葉種の生産者としての猟師	43
3) 公共事業的狩猟と猟師	44
コラム カワウソ	(佐々木 浩) 46
コラム ニホンアシカ	(井上貴央) 47
第3章 日本の哺乳類学の黎明	(川田伸一郎) 48
1. はじめに	48
2. 哺乳類研究の黎明	49
1) 明治初年の哺乳類解説と「動物学雑誌」	49
2) 日本初の哺乳類研究者、波江元吉	50
3) 欧米にも日本産哺乳類標本を提供した土田兎四造	51
3. 標本の収集と作製	52
1) 本剥製技術の発展	52
2) 仮剥製標本の普及	53
4. 海外に渡って研究された哺乳類標本	54
1) 来日外国人による哺乳類標本収集	54
2) 在日外国人商人の役割	56
5. 日本人による哺乳類の分類研究	57
1) 日本人が記載した哺乳類の新分類群	58
2) 応用動物学における哺乳類研究	59
3) 近代的哺乳類学に向けての進展	60
6. 渡瀬庄三郎とその門下生	61
7. 戦前の日本哺乳動物学会とその終焉	61
8. 後の「日本哺乳動物学会」復活へ	62
コラム 黒田長禮	(下稲葉さやか) 67
コラム 森為三	(平田逸俊) 67
コラム 岸田久吉	(安田雅俊) 68
第4章 アジアの中の哺乳類学, 過去・現在・将来	69
1. 日本の戦前の哺乳類学(大正~終戦): 哺乳類学の地方展開の時代	(大館智志) 69
1) はじめに	69
2) 地方における歴史把握の必要性	69
3) 北海道	70
4) 樺太および千島列島	72
5) 京都	73
6) 九州	73
7) 琉球列島ないし南西諸島	74
8) 台湾	74
9) 南洋群島(ミクロネシア)	75
10) 朝鮮半島	75
11) 旧満洲国および中国	76

12) おわりに	77
2. 日本の戦後の哺乳類学（終戦～平成）：哺乳類学の発展確立期	（押田龍夫） 79
1) はじめに	79
2) 中国との共同研究	79
3) 韓国との共同研究	81
4) ロシアとの共同研究	82
5) 台湾との共同研究	82
6) 東南アジアとの共同研究	84
7) これからのアジアにおける哺乳類研究	86
コラム 阿部余四男	（平田逸俊） 90
第5章 日本人と哺乳類－日本列島の環境史	（三浦慎悟） 91
1. はじめに	91
2. 旧石器時代，現生種の誕生	92
1) オーバーキル仮説と狩猟	92
3. 縄文時代，狩猟採集生活と草食獣	94
1) 縄文遺跡の立地環境	94
2) 縄文人と人為草原	95
3) 縄文人とイノシシ	96
4. 弥生・古墳時代，環境改変と新たな草食獣	96
1) 農耕とその波紋	96
2) ウマとウシの登場	97
3) 古代人と哺乳類	97
5. 古代（飛鳥・奈良・平安時代），ウマとウシによる国の牽引	98
1) 牧の生態学	98
2) ウマの実力と拡散	102
3) 牧の副産物	102
4) ウシと鉄	102
6. 中世，列島の原景観の成立	103
1) 人為攪乱と哺乳類相	104
7. 近世，東北の牧と人々	105
1) シカの狩猟	106
2) 江戸期のオオカミ被害	108
3) 岩手のウマとシカ，その後	109
8. 近代，北海道でのウマ生産とその波紋	109
1) エゾシカの動態	109
2) ウマとオオカミ	111

【第2部 各論】

◆分類学 / 進化

第6章 現代の哺乳類像	（長谷川政美） 115
1. 分子系統学の発展	115

2. 分類体系の見直し	116
3. 大陸移動と哺乳類の進化	120
4. 有袋類進化に果たした大陸移動の役割	121
5. 哺乳類の海を渡った移住	122
6. 絶滅種の DNA 解析	123
7. おわりに	123
第7章 化石からみた哺乳類の進化 (西岡佑一郎)	125
1. 欧米における古哺乳類学のあゆみ	125
2. 哺乳類の起源に至る化石証拠	126
1) 古生物学における哺乳類	126
2) 哺乳類へ繋がる系統	127
3) 中生代の哺乳類	129
4) 有胎盤類の爆発的進化	130
3. 新生代の哺乳類進化	132
1) 古第三紀の哺乳類相	132
2) 始新世 / 漸新世境界における哺乳類相の変化	135
3) 新第三紀の哺乳類相	136
4) 鮮新-更新世の哺乳類の大移動	138
5) 化石からみた現生哺乳類の起源	139
第8章 日本の哺乳類の分類学と生物地理学 (本川雅治)	142
1. はじめに	142
2. シーボルト標本と日本産哺乳類の分類学	143
3. 明治維新と近代科学としての分類学の導入	144
4. 日本人による哺乳類分類学の幕開け	145
5. 大正期から終戦までの昭和初期の哺乳類分類学	146
6. 終戦以降の昭和期の哺乳類分類学	148
7. 平成期から現在の哺乳類分類学	149
8. 日本に分布する陸棲哺乳類	150
9. 日本産陸棲哺乳類の分布パターン	154
10. 日本産陸棲哺乳類の動物地理学	155
11. アカネズミの研究	156
12. 日本の哺乳類分類学のこれから	157
コラム 今泉吉典	160 (本川雅治)
コラム 青木文一郎	161 (本川雅治)
第9章 方法論からみた哺乳類の種認識 (岩佐真宏)	162
1. 種とは?	162
2. 生物学的種概念	163
3. 黎明期の種認識	164
4. 分類学の発展と種認識	165

5. 分類学の理念の多様化	165
6. ゲノムからの種認識	166
7. 生物学的種概念の盲点	169
8. 哺乳類の種認識	170
第10章 博物館・動物園と哺乳類の学の交錯史	(遠藤秀紀) 173
1. 史的立脚点	173
2. 近代化, 震災, 戦災	175
3. 縦割りの彼方	177
4. 乖離する分類学者	180
5. 外からの支援	182
6. 大学になりたかった博物館と博物館になりたかった大学	183
7. 園に育たない学	184
8. 教育の商業化	185
第11章 外来哺乳類の歴史	(池田 透・小林秀司・村上興正) 188
1. 外来哺乳類問題とは何か	188
1) 社会的課題としての外来種問題と外来哺乳類の位置づけ	188
2) 外来種の定義	188
3) 日本の外来哺乳類リスト	188
4) 外来哺乳類によって引き起こされる問題	189
5) 日本の外来哺乳類導入の歴史	189
2. 外来哺乳類にかかわる法的規制と管理	190
1) 「外来生物法」が成立するまでの法的規制	190
2) 「外来生物法」の成立過程	191
3. 日本の主な外来哺乳類の歴史 (各論)	194
クマネズミ	194
イエネコ (ノネコ)	195
ファイマンゲース	196
アメリカミンク	198
クリハラリス	198
タイワンザル	200
マスクラット	201
ヌートリア	201
アライグマ	203
キョン	204
コラム 高島春雄	(平田逸俊) 208
◆古生物学	
第12章 哺乳類化石の研究史	(河村 愛・河村善也) 209
1. 江戸時代 - 「龍骨」と哺乳類化石 -	209
2. 明治時代初期 - 「龍骨」から古生物学へ -	209

3. 明治時代から第2次世界大戦まで—日本人の研究—	210
4. 第2次世界大戦後1970年代まで	211
1) 古第三紀の哺乳類化石の研究	212
2) 新第三紀の哺乳類化石の研究	212
3) 第四紀の陸生哺乳類化石の研究	212
4) 第四紀の海生哺乳類化石の研究	213
5. 1980年代とそれ以降	214
1) 中生代の哺乳類化石の研究	214
2) 古第三紀の哺乳類化石の研究	214
3) 新第三紀(中新世)の陸生哺乳類化石の研究	215
4) 新第三紀(中新世)の海生哺乳類化石の研究	215
5) 新第三紀(鮮新世)の陸生哺乳類化石の研究	216
6) 新第三紀(鮮新世)の海生哺乳類化石の研究	217
7) 第四紀の陸生哺乳類化石の研究	217
8) 第四紀の海生哺乳類化石の研究	221

◆医学/畜産学

第13章 感染症の哺乳類学	(亘 悠哉・鈴木正嗣)	227
1. はじめに		227
2. 総論		227
1) 感染症にかかわる基礎用語と概念		227
2) 「感染症の哺乳類学」の歴史ならびに近年の状況と課題		229
3. 各論		232
1) ダニ媒介性感染症		232
2) 豚熱		234
3) トキソプラズマ症		235
4) ニホンジカやイノシシ等の食資源化にかかわる感染症		236
4. おわりに：これからの展望・研究の発展に向けて		237
第14章 実験動物としての哺乳類	(織田銑一)	241
1. 実験動物とは		241
2. 実験動物の多様性と斉一性		241
1) 動物種の多様性		241
2) 実験動物の斉一性		242
3) 実験動物としての哺乳類バイオリソース		242
3. 人のモデルとしての実験動物		242
1) 疾患モデル		242
2) 野生動物由来の疾患モデル		243
4. 野生哺乳類の実験動物化		243
1) 野生動物の実験動物化の意義		243
2) 日本人による野生哺乳類の実験動物化		244
3) 実験動物候補(資源)の探索・海外調査		244

5. 主要な哺乳類の実験動物・その近縁種	245
1) マウスとハツカネズミ類	245
2) ラットとクマネズミ属	245
3) モルモットとヤマアラシ形亜目	246
4) ゴールデンハムスターと類縁種	246
5) スナネズミ	246
6) ウサギと兎形目	247
7) イヌと食肉目	247
8) ブタと偶蹄目・奇蹄目	247
9) カニクイザルと霊長類	247
6. 発展途上の主な日本の実験動物	248
1) ハタネズミ類	248
2) アカネズミ類	248
3) カヤネズミとその他のネズミ類	248
4) スンクスと食虫類	248
7. 日本における実験動物としての哺乳類の利用史	249
1) 18世紀～20世紀前半の実験動物としてのマウス	249
2) 明治・大正・昭和前期の実験動物	249
3) 731部隊と実験動物・動物実験	250
4) 戦後初期の実験動物	251
5) 実験動物の近代化—文部省特定研究「実験動物の純化と開発」	251
6) 実験動物分野における哺乳類学の今後	251
8. 実験動物としての哺乳類研究に関する功績の足跡	252
1) 平岩馨邦	252
2) 近藤恭司	253
3) 土屋公幸	253
コラム 森脇和郎	256 (鈴木 仁)
第15章 畜産動物の研究と展開	(黒澤弥悦) 257
1. 在来家畜とは何か	257
2. ブタ	257
1) 家畜化	257
2) 在来ブタ	258
3. ウシ	260
1) 家畜化	260
2) 在来ウシ	261
4. ウマ	262
1) 家畜化	262
2) 在来ウマ	263
5. おわりに	264

◆生態学 / 産業

第 16 章 鯨類とその資源管理	(加藤秀弘)	267
1. はじめに		267
2. 鯨類の概要		267
1) ヒゲクジラ類		267
2) ハクジラ亜目		268
3. 分布と回遊		269
4. 鯨類の生物学的特性		269
5. 捕鯨業		271
1) 捕鯨業の盛衰と IWC における論争の変遷		271
2) 日本の IWC 脱退と商業捕鯨の再開		272
6. 資源管理方策とその変遷		273
1) 国際捕鯨委員会における鯨類資源管理		273
2) 日本国内の資源管理体制		275
3) 捕鯨業の種別		275
コラム 大隅清治	(加藤秀弘)	278
第 17 章 哺乳類を対象にした生態学のあゆみ：応用から基礎へ	(齊藤 隆)	279
1. はじまり		279
2. アジア太平洋戦争からの再出発		280
3. 伊藤嘉昭と太田嘉四夫		281
4. 応用から基礎へ		283
5. パラダイムシフト		284
6. 時系列データ分析の時代		285
7. 第 4 段階への道		288
コラム 太田嘉四夫	(中田圭亮)	290
コラム 田中亮	(村上興正)	291

◆生態学 / 群集

第 18 章 群集の中の哺乳類	(高槻成紀・田村典子・中下留美子)	292
1. はじめに		292
2. 食性分析法		292
1) 直接観察法		292
2) 胃内容物分析法		292
3) 糞分析法		292
4) 食痕		292
5) DNA 分析法 (DNA メタバーコーディング法)		293
6) マイクロウェア解析		293
7) 安定同位体比分析法		293
3. 食性の類型		293
4. 主な哺乳類の食性		294
1) 真無盲腸目		294

2) 偶蹄目	294
3) 食肉目	295
4) 兎形目	297
5) 翼手目	297
6) 霊長目	298
7) 齧歯目	298
5. 食物資源としての哺乳類	299
1) 被食者としての哺乳類	299
2) 死体	299
6. 食性の可塑性と適応	299
1) 食性と消化器官	299
2) 食性と体サイズ	300
3) 食性と学習	301
4) 有害物質への適応	301
7. 種間関係	301
1) 偶蹄目の種間関係	301
2) 食肉目の種間関係	302
3) 翼手目の種間関係	302
4) 齧歯目の種間関係	303
8. 食物と個体群動態	303
1) ネズミ類の個体数変動と堅果の豊凶	303
2) シカの個体数	303
9. 植物と哺乳類	304
1) ニホンザルによる種子散布	304
2) 食肉目による種子散布	304
3) 齧歯目による種子散布	305
4) 翼手目と植物の関係	306
10. 生態系の中の哺乳類	306
1) シカによる生態系への影響	306
2) シカ以外の哺乳類	308
11. おわりに	309

◆生態学/行動社会

第19章 動物社会の研究史	(中川尚史) 317
1. はじめに一河合雅雄逝去	317
2. 河合以前	317
1) 生物に社会を認めた今西錦司	317
2) 今西以前	318
3) 欧米の同時代人	319
3. 第2次世界大戦直後	320
4. 戦後の海外調査再開	320
1) 海外調査再開期	320

2) 社会生態学	321
3) 系統的な視点	321
5. 社会生物学以後	322
1) 社会生物学の登場	322
2) 哺乳類の社会生物学	322
3) 社会組織の社会生態学から社会構造の社会生態学へ	323
6. おわりにーポスト社会生態学	326
1) 社会的知性	326
2) 社会の文化論再び	327
コラム 河合雅雄	(小林秀司) 329

◆生態学 / 社会

第20章 野生動物の保全と管理	(梶 光一) 330
1. はじめに	330
2. ニホンジカの研究史	330
1) 1970年代	330
2) 1980年代	330
3) 1990年代	332
4) 2000年代	333
5) 2010年代(2022年まで)	335
6) まとめ	338
3. イノシシの研究史	339
1) 1970年代	339
2) 1980年代	339
3) 1990年代	339
4) 2000年代	339
5) 2010年代(2022年まで)	341
6) まとめ	343
4. クマ類の研究史	343
1) 1970年代	343
2) 1980年代	343
3) 1990年代	345
4) 2000年代	346
5) 2010年代(2022年まで)	347
6) まとめ	351
5. おわりに	351

◆生物多様性 / 生態学

第21章 亜熱帯生態系の哺乳類研究	(伊澤雅子・山田文雄) 360
1. はじめに	360
2. 島嶼の成立と哺乳類群集の特徴	360
3. 琉球諸島開拓の歴史	361

1) 沖縄諸島・先島諸島・大東諸島	361
2) 奄美群島	362
4. 調査研究の歴史と日本哺乳類学会の取組み	362
1) 沖縄諸島・先島諸島・大東諸島	363
2) 奄美群島	364
3) 日本哺乳類学会の行政への要望などの活動	366
5. 希少種保全・生物多様性保全の時代へ：行政機関などの取組み（1970年～2000年代）	366
1) 沖縄諸島・先島諸島・大東諸島	366
2) 奄美群島	367
3) 外来哺乳類の対策	368
6. 今日の状況，世界自然遺産登録へ（2000年～2022年）	369
1) 世界自然遺産登録	369
2) 琉球諸島の生物多様性と固有性の価値の世界的評価	370
3) 世界遺産委員会からの4つの要請事項	370
4) 沖縄島北部と西表島の課題	371
5) 奄美大島と徳之島の課題	372
6) 周辺島嶼の課題	372
7. おわりに	373
コラム 折居彪二郎	(子安和弘) 376
コラム トゲネズミ類	(城ヶ原貴通) 376
コラム アマミノクロウサギ	(山田文雄) 377
コラム ジュゴン	(大泰司紀之) 377
第22章 北方生態系の保全と大型哺乳類の研究	(山中正実) 379
1. 北海道における哺乳類研究の系譜	379
2. 大型哺乳類研究の系譜と展開	379
1) 海獣談話会からはじまる北海道の海生哺乳類の研究	379
2) エゾシカ研究グループ	381
3) 北大ヒグマ研究グループ	382
4) 知床動物研究グループ	382
3. 国立公園と大型哺乳類の保全・管理	383
1) 国立公園における哺乳類の保全・管理とその課題	383
2) 知床国立公園，知床世界自然遺産地域における哺乳類研究と保全管理上の課題	386
4. 自然生態系の保全・管理を支える大型哺乳類の研究	389
1) エゾシカ	389
2) ヒグマ	392
3) 鱈脚類とラッコ	396
コラム ラッコ	(服部 薫) 405
資 料	406
資料1 学会事務センター破綻をめぐって	(間野 勉) 406
コラム 哺乳類は「ほ乳類」ではない	(「日本の哺乳類学 百年のあゆみ」編集委員会) 410

資料2	日本哺乳類学会の要望書等の提出状況	（村上興正）	411
資料3	日本哺乳類学会と環境省レッドリスト	（石井信夫）	414
資料4	日本哺乳類学会の歴代役員		416
資料5	日本哺乳類学会大会開催地および実行委員		417
引用文献	（刊行のことば・コラム）		418
索引			420